

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

アメリカ ニューヨーク補習授業校

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦労した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

① 学校の規模や子どもたちの実態

- 本校は、NYCのクイーンズ区にあるLI校(250名)と、NYCの北側に隣接するウェストチェスター郡にあるW校(480名)の2校から構成されている。
- いずれも幼児部年中組から高等部2年生までの学齢の子どもたちが学んでいる。
- LI校は長期滞在者の割合が多くほぼ固定化しているのに対し、W校はマンハッタンにある日系企業の駐在員が多く住む地域にあり、年間60名ほどの子どもの出入りがある。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- ニューヨーク州は最大の感染国であるアメリカでも、最大の感染者と死者を出している場所である。
- 3月には外出制限措置（New York State on PAUSE）が取られ、一部地域は緩和措置が始まったが、NYC周辺は現在（5月16日）も続いている。
- 感染者は減少傾向にあるものの、今も全く油断ができない状況である。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯

- 本校事務所は、ニューロシェルというNYCに隣接する郡にあるのだが、2月にニューヨーク感染者第1号が出たということで、その名前が知れ渡ることとなった。
- 3月15日(日)に卒業式を予定していたので、職員も感染に注意をしながら何とか実施の方向で準備を進めていた。しかし、感染は拡大していき、卒業式を予定していた現地の中学校も休校となり、15日の卒業式は中止せざるを得なくなった。
- せめて、卒業証書の授与だけでも実施したいという思いで、各地区校の最終授業日(14日)に簡易の卒業式を実施する方向で進めていた。LI校は、在校生は休校、卒業生だけを集め午前中に卒業証書を手渡した。W校は現地校のある学区でコロナウイルス感染者が出たために休校措置をとらざるを得なくなり、卒業証書を手渡すこともできなかった。
- どの学年も学年末の最後の日が休校となり、令和元年度は締めくくりができない状態で終わってしまった。その後、ニューヨーク全体の感染者増加に伴い、外出制限措置が取られ、原則在宅勤務となり事務所はクローズ。令和2年度に向けての準備も、在宅勤務のまま手探り状態で進めていくこととなった。

④ 実際の取り組み

- ニューヨーク州では新型コロナウイルスへの措置が当初4月18日までとされていたので、4月25日(土)の開校に向けて準備を進めることになった。その間、年間計画にある3回(4月4日、11日、18日)の授業日をどうするのかが当面の課題であった。
休校にする案もあったが、現地校でオンライン授業を行っていることがわかり、情報を集めていくとオンライン会議ソフト「Zoom」に辿り着いた。
- 職員間で初めてのZoom会議を開いた。私も初めての体験だったが、操作はそれほど難しくなく、何よりお互いの顔を見て話し合いができることは大きかった。検討を重ね、4月4日からZoomを使った授業を開始することにした。そのために、Zoom操作が分かりやすく書いてあるインターネット情報を集めたり、学校ホームページに使用する教材を掲載したりしながら準備を進めた。

- 3月25日に先生方へ連絡。「使ったことがありません」「どうやってするのですか」「自信がありません」問い合わせがすごかった。
更に、4月から初めて教師になる新任の先生もいて、不安は尽きない。
「とにかく使ってみましょう」という所からスタートである。
事務所職員が入り先生方とZoomを行う。とりあえず全員の先生が無事入れたことがよかったのか、もう走り出すということで、先生方も覚悟を決めたという感じだった。
- 3月26日、保護者へ連絡。「どんな授業になるのですか」「教室と同じようにできるのですか」「子どもが長時間PCの前になんか座っていません」など、こちらも問い合わせが殺到した。学校側としても説明はするのだが、実際にやってみないと分からないことも多い。

- 更に、NYCの現地校が Zoom使用をやめたことで、Zoomそのものへのセキュリティー信頼度の問題がうわさされ、心配する先生方や保護者の方も多かった。特に先生方は、個人のPCで操作をすることとなり、学校側のサポートも不十分であった。
今考えると、本当に 強引なスタートだったと言われても仕方がない。中高等部は現地校でも実践していることなので、負担はそこまでなかったようだが、幼児部など小さい子どもをもつ保護者からの問い合わせは多く、入学を取りやめる方もいた。
- 4月4日。第1回授業日スタートである。「担任の先生と子ども・保護者がつながる」ことを第1に考え実施した。時間通りに繋がらない家庭もあり、問い合わせが殺到。幸いにして、時間はずれたが全クラス先生と子どもとも学級開きはでき、最低限度の目標は達成することができた。
3回を乗り切ろうと考えていただけだったので、後の2回も何とかしていきたいと思っていた。

- 期待は裏切られる。現地校の休校措置が5月9日までに延長された。オンラインで続けるためには、教科書等が不可欠である。しかし、配付すらできない。副教材は届いていないものもある。国語と算数の教科書は当面使用する箇所をPDF化して学校HPに掲載した。ドリルや問題集などの副教材は、出版社に許可をもらい同じように掲載できた。このような状況を考慮してくれた出版社に感謝したい。
- 結局、現地校は今年度中(6月末まで)の休校が決定され、それに伴い補習校も1学期は全てオンライン授業をすることとなり長期戦に備える必要が出てきた。授業で使用する教科書を各家庭に発送することにした。何とか高等部まで発送を終えたが、副教材はまだ全部届いておらず、滞っている状況である。

- オンライン授業では通常の授業とは全く異なることを先生方にも保護者の方にも伝えた。

「授業進度は通常通りにはいかないこと」「オンライン授業期間中の評価はしないこと」「それに伴う宿題等の提出・確認は行わないこと」を共有して、学校と家庭が協力・連携して取り組むことを確認した。なかなか思うような生活ができない状況の中で「土曜日は補習校の日」という生活の節目となっていることや、「日本語で日本の学習を継続する」ことの意義を啓発してきている。

- また、5月2日に「オンライン授業への参加意思確認」継続、休学、退学を保護者に選択させることにした。1割弱の休学・退学者が出たが、9割以上は継続を希望されたことに、本校としてのオンライン授業が定着してきたことが分かる。

⑤ 苦勞した（している）こと

- 一番大変なのは、先生方と保護者の負担感・不安等への対応である。
- 先生方は、これまで教室でデジタル教科書を使用しながら、グループ活動をしたり板書したりして子どもに授業を行っていた。しかし、それができなくなってしまった。
（＊注 アップグレード版の ZOOM の導入により、できるようになった。）
- 初等部は教科書が全面改訂だったために、デジタル教科書そのものが使えない。新しいデジタル教科書はまだ先生方の手元にはない。
その分、紙に書いたりパワーポイントを作成したりする準備時間が増えた。
更に教室のような環境がないために、オンライン授業ではどうしても作業に時間がかかったり子どもの参加意欲に違いがあったりする。その授業参加意識を上げるためにも、先生方の苦勞は絶えない。

- 保護者の負担も大きい。Zoom 操作の補助が必要である。学齢が低い子どもほど授業中の 操作は必要で、親もずっとついていることとなる。
また、ホームページに掲載したとはいえ、印刷したり宿題を見たり先生に返信したりする、印刷用紙、インク、手間を考えると、兄弟 がある場合は相当な時間と費用の負担となる。
費用対効果の問い合わせも多いが、保護者の心情も理解できる。
- 教師と保護者の両方から「教科書はいつ手元に来るのか」「副教材はまだか」の要望は後を絶たない。前述したが教科書は約730人分を郵送した。
外出制限が続いている中、発送作業も極めて少人数でしか行えないという大変さもあるし、多額の送料がかかっている。経費面からしても負担は大きくなっている。その上、副教材は今も全てが届いているわけではなく、私たちも見通しがもてない何ともしがたい状況なのである。
- 先生方、保護者の方のニーズと事務所でできることとのせめぎ合いが、何とも苦しいところである。厳しい問い合わせも少なくなく、対応には苦慮している。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 苦しいことが多い2ヶ月間だったが、補習校として教師と保護者の意識改革につながったことは、嬉しい出来事であった。先生方は、オンライン学習になったことで、これまでの授業の見直しを余儀なくされた。それが、先生方の指導力向上につながっている。また、オンライン授業だからこそ、見える一人一人の子どもたちの様子や、発言もあると聞いている。
- 学び方が変わったことで子どもたちの学習状況も変容してきている。保護者の方は、家庭で子どもの学習を見たり支援したりする必然性が生まれた。これによって、家庭での学習の機会が増えたことで、保護者の支援体制も充実することになった。「家庭は第2の教室」の意義がこれまで以上に実践されることとなった。
- サプライズで、本校の経営母体であるNY日本人教育審議会が作成した応援ビデオメッセージが届いた。多忙な審議会会長自らの応援メッセージに加え、本校の子どもたちや保護者からの励ましのメッセージがあり、私たちも元気と勇気をもらった。先生方にも送信し、これからの授業づくりの活力となったことと思う。

⑦ 今後への課題

- ニューヨーク州の教育機関は今年度中の休校が決まり、新学期である9月からの再開が期待されている。それまでオンライン授業は継続する。そのためにも副教材等の環境整備を充実させる必要がある。また、現地校も休校、長引く外出制限措置のために、ストレスや悩みを抱える子どもたちも少なくない。その心のケアをどのようにしていくのか、対応を考えていく必要がある。幸い、NYのカウンセリング資格をもった日本人教育相談員が2名配置されているので、気軽に相談できる体制があることは心強い。
- 学校が再開したら、授業進捗の確認をはじめ、学校行事の修正等の年間計画の見直しが必要である。ただでさえ、授業時数が少ない補習授業校でどこまでオンライン授業での遅れを取り戻せるのか、先生方からも不安の声が既に上がっている。今後の時数確保はもちろん、授業の質的転換が求められている。